29-1157　W113-8

オプソの使用調査と麻薬処方の推移について

○篠原 高雄[1], 田村 勝彦[1], 永井 茂[1]（[1]杏林大病院薬）

【目的、方法】: オプソ®内服液は、大日本製薬が開発した経口のモルヒネ速放性製剤の液剤である。モルヒネ液剤は、以前は薬剤部（薬局）などで調剤していたが、予製を含め調剤に手間がかかる、強い苦味を矯正する必要がある、冷所保存にしても期間が限られる、などの問題点があった。これらを改善し、がん患者の疼痛に有効な、また QOL 向上に貢献できる薬剤と考え、2003 年 6 月に発売となった。そこでオプソ®内服液が実際に服用しやすいか、また以前の薬剤部で調剤した水薬と比較して扱いやすいかなどを患者様、看護師、薬剤師を対象にアンケート調査を行った。また、麻薬製剤の推移について検討した。

【結果】:患者様へのアンケートでは、痛みに対して有効率 93.3%であった。味は、普通との答えが多く評価は低率だったが、飲みやすさは 94%が服用しやすいと答えた。持ち運び、保存は 73.7%が便利であると答えた。

看護師へのアンケートでは、与薬の際 96.5%が準備しやすいと答え、時間は、88.9%が短縮できたと答えたが、平均 1.5 分の短縮にとどまった。痛みには有効率 73.7%で患者様自身より低率だった。持ち運びは 93%、保存は 83%が便利と答えた。

薬剤師へのアンケートでは、調剤は 96.6%がしやすいと答え、調剤にかかる時間は全員が短縮でき、平均 14 分短縮できたと答えた。調剤過誤も、全員が防止しやすいと答えた。

【考察】: 患者様の癌性疼痛治療薬に対する剤形の好みは多岐にわたっており、選択肢が多いことが望ましいが、薬事委員会や金庫のスペースなどの問題がある。

製薬企業が調剤品を製品化することは、製剤技術が向上し、服用しやすく、扱いやすいものになり、患者様や医療従事者に大きく寄与するものと考える。